

秋田県

公文書館だより

第39号

令和4年3月10日

分間江戸大絵図(泉5)

〈新資料の紹介〉 泉明収集資料
分間江戸大絵図(泉5)

(道因原図・須原屋茂兵衛編)

この絵図は、令和3年7月に泉明氏(男鹿市)より寄贈されたものです。慶応元年(1865)須原屋茂兵衛が販売した木版色刷りの絵図で、大きさは186×204cm、西が上部に来る構図になっています。大名屋敷には家紋、寺社にはランドマークとなる建物と木立、町人の住む地域の町名がびっしり書かれているのを見てみると、思わず「花のお江戸は八百八町」と往年の時代劇のテーマソングが口を突いて出てきます。

大絵図には暦、三十三番巡礼札所観音、そしてどこから江戸なのかを示す杭を打った29か所の町名が表示されています。ただし「此杭より内小荷駄馬口附之者不可乗者也」と書かれた杭は、元禄11年(1698)に設置されましたが、慶応元年時点では存在しないとあります。また、毎日の干潮と満潮の時刻を記した「潮汐時刻早見」もついています。河岸で働く人や水上交通に携わる方にとっても、利便性の高い大絵図であることが分かります。

令和4年度行事予定

◆企画展

8月25日(木)～10月16日(日)

◆公文書館講座

●古文書解読講座

6月24日・7月1日・8日・15日

●古文書整理ボランティア養成講座

5月12日・6月2日・7月14日

8月4日・9月8日・10月13日

11月10日・12月1日(月一回木曜日)

◆県政映画上映会

8月25日(木)・26日(金)

今後の情勢によっては変更の可能性もあります。ご了承ください

利用案内

◆開館時間

平日 9時～19時

土日祝日 9時～18時

書庫内資料の利用申請は17時30分までとなっております

◆休館日(令和4年度)

毎週水曜日

年末年始12月28日～1月3日

特別整理期間

6月9日～6月14日

12月8日～12月13日

休館日についてはウェブサイトに、または当館内の掲示等でご確認ください

翻刻本『岡本元朝日記』全八巻完結

当館では、秋田藩の重臣岡本元朝の元禄8年から正徳2年(1695〜1712)にわたる18年間の日記について、平成26年度から『岡本元朝日記』として翻刻本の刊行事業を開始し、今年度の第8巻をもって全巻を完結しました。

岡本元朝は元禄4年8月に相手番、10年7月に文書改奉行、14年10月に家老に任じられました。そのため、日記には役務に関する詳細な内容が、元朝の私生活の事柄とともに記されています。

文書改奉行時代の元朝は、3代藩主佐竹義処による改革の時代、「佐竹家譜」編纂と系図改めによる座格制(家格制)再編の首班として、

事業の実務を日記に書いています。そのため、「秋



田藩家蔵文書」編纂の経緯や実態も日記から分かります。

家老時代の元朝は義処の改革で始まった会所政治の立ち上げに尽力し、元禄16年に義処が急死した後は4代藩主の幼君義格を補佐し藩政を主導しました。元朝の筆まめな性質が幸いし、現在、『岡本元朝日記』

を読めば、その間の藩中枢の動きを細かな所まで追うことができます。

一方、元朝は赤穂藩の家老大石良雄と同時代人で、元禄15年12月23日の条には江戸から届いた吉良邸討ち入りの情報を記録しています(翻刻本第2巻)。その他、宝永4年(1707)11・12月の日記からは、富士山噴火時の江戸の状況を日々刻々に

知ることができます。

秋田藩領内の出来事に対しても好奇心旺盛で、火災・殺人・盗賊・狼

出没ほか元禄・宝永・正徳期の諸相を日記中に活写しています。

さて、『岡本元朝日記』第8巻では、岡本家に不幸が度重なり、宝永7年(1710)11月に庶子小藤次(5歳)、12月に嫡子掃部元貞(23

歳)が抱瘡(天然痘)で命を落としました。日記から、父親元朝の悲痛な思いが伝わります。元朝は翌正徳元年(1711)5月に藩主義格の秋田入部を果たしますが、同年暮れに病に倒れ、翌2年2月16日に享年52歳で死去しました。

翻刻本『岡本元朝日記』各巻の収録年代

巻数	収録年代
第1巻	元禄 8年(1695) 1月～元禄14年(1701) 9月
第2巻	元禄14年(1701)10月～元禄16年(1703) 2月
第3巻	元禄16年(1703) 3月～元禄17年(1704) 2月
第4巻	元禄17年(1704) 3月～宝永 2年(1705) 6月
第5巻	宝永 2年(1705) 7月～宝永 4年(1707) 3月
第6巻	宝永 4年(1707) 4月～宝永 5年(1708)12月
第7巻	宝永 6年(1709) 1月～宝永 7年(1710)閏8月
第8巻	宝永 7年(1710) 9月～正徳 2年(1712)12月

〒01-0901
秋田市寺内字三千刈一〇〇一
秋田活版印刷株式会社
電話〇一八(八八八)三五〇〇

左記までお問い合わせください。

公文書の引渡し・公開状況

当館では、歴史資料として重要な公文書等の保存と利用のため、秋田県行政文書管理規則等の規定により、県が作成し保存期間を過ぎた公文書の引渡しを受

けています。これらの文書は資料管理要綱等に基づいて一次評価選別を行い、保存する文書を決定します。

文書の完結年度から30年経過し、まず二次評価選別を行い、再度保存する文書を決定するとともに、保存とした文書の個人のプライバシーを

侵害する情報の有無等を点検し、公開と非公開を決定

します。公開資料は、請求により閲覧室で閲覧できます。

<令和3年度公開状況> (件数)

新規公開の対象とした公文書		1,446
決定	公開	701
	一部非公開	139
	非公開	606

<令和3年度引渡・保存状況> (件数)

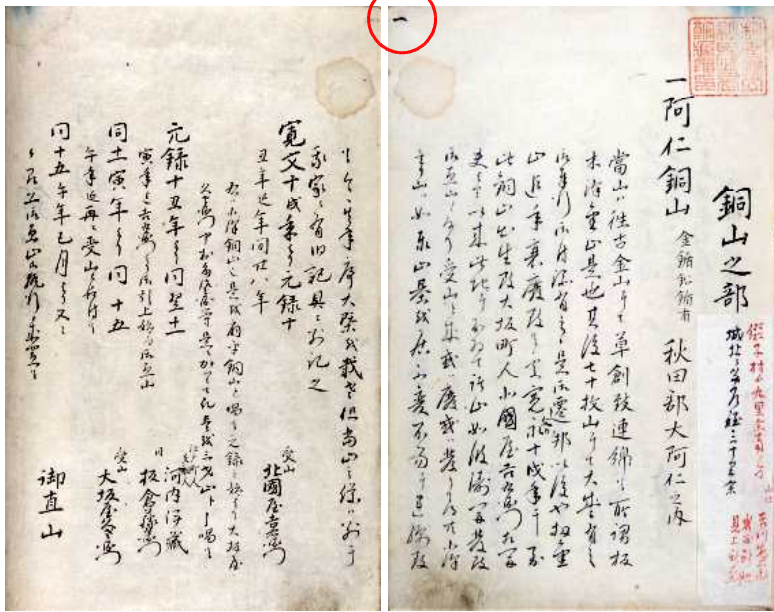
引渡元		引渡年度	引渡	保存	保存率
知事部局		令和2	6,860	1,248	18.2%
行政委員会等	監査委員	令和元	9(38)	6(3)	66.7%
	教育委員会	令和2	18	18	100.0%

() 内は冊数。令和2年度引渡分から1冊を1件として登録している。

「鉾山紀年録」

解説 巻目録

「鉾山紀年録」(混架一八一二四八一〜五)は、文政二年(一八一九)に杉原寿山が編纂し、同七年に増補した秋田藩領内鉾山の台帳で、十七世紀の秋田藩政初期から十九世紀初めの文政期まで二百年余にわたる領内鉾山の来歴や基礎情報を記載しています。杉原家は、鉾山を統括した惣山奉行の下役人を代々務めました。

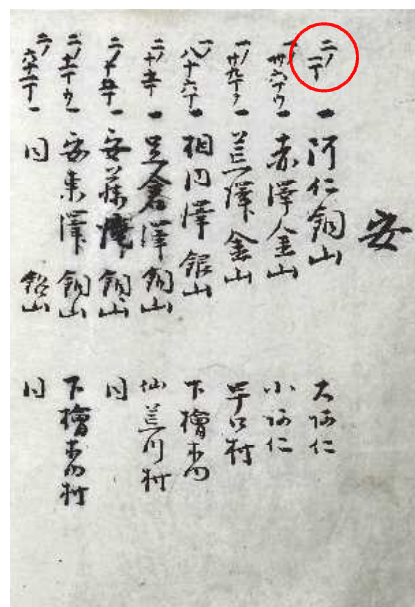


金・銀山、巻之二に銅・鉛山、巻之三に鉛山、巻之四に鉄・錫・鉍丹(亜鉛)・硫黄・明礬・砥石・石類(水晶・燧石ほか)・土類(朱・白土ほか)の鉾山と金銀吹分処の情報を収録しています。凡例によると、杉原家では以前は「諸山年数帳」という台帳に鉾山と山師の名前、免許の年月日等を日付順に記録していました。これを再編集したのが「鉾山紀年録」で、秋田藩領内の六百近い鉾山について検索性の向上を図る工夫が凝らされています。

さて、凡例には「鉾山紀年録」の使い方、秋田藩の鉾山史概略などが記されています。凡例の次には目録があり、巻之一から四の目次のほか、「金山之部」など鉾山種別の目次も作られ、郡別(雄勝・平鹿・仙北・河部・秋田・山本)に鉾山名と所在地の村名が記されています。続く「山処郡分ケ」では郡別の鉾山数と内訳が、雄勝郡であれば総数百一ヶ山、金山十二ヶ山、銀山四十二ヶ山などとあります。また「金山五ヶ山之事」は、阿仁・松木内・大葛・杉沢・長間金山を当時のベスト5に挙げています。この他、「銀山八ヶ山之事」で院内銀山以下ベスト8を挙げ、「阿仁八ヶ山之事」で阿仁銅山の内訳、「両鉛山之事」で藤琴・大澤鉛山を記しています。秋田藩領内で鉾山経営に携わる者にとっての基礎情報と言えるでしょう。

上の写真は巻之二にある秋田郡大阿仁の阿仁銅山の記事で、草創期は金山でしたが次第に衰微し、寛文十年(一六七〇)に銅山になったと記

されています。鉾山には、藩直営の直山と山師に請け負わせた請山がありました。阿仁銅山の来歴から、寛文十年から元禄十年(一六七〇〜一六九七)が請山、元禄十年から十一年(一六九七〜一六九八)が直山、元禄十一年から十五年(一六九八〜一七〇二)が請山、元禄十五年以後は再び直山となった変遷をたどることができます。



索引が付けられていることも特長の一つです。首巻目録の最後にある「以呂波分ケ之分」を見れば、巻之一から四までに収録された鉾山の記録をイロハ別に並べた鉾山名頭文字の音読みで検索できます。例えば阿仁銅山を調べる場合、「安(あ)」の部で阿仁銅山を引きます。そこに「二ノ一丁」とありますが、これは「鉾山紀年録」巻之二の一丁目から記録があることを示します。この記号を使えば、巻之一から四までに収録された鉾山を検索する際に便利です。現在、秋田藩領内にあった鉾山を研究する際にも役立つ資料と言えるでしょう。

【柴田知彰】

義和公阿仁鉞山 巡覧の旅

語り部 藤田誠治

お供は三百人

文化六年（一八〇九）九月、義和は阿仁鉞山の巡覧に出かけました。これを記録したものに「義和公御道濃（の）記 阿山比川吉冊・仙北三郡吉冊 全」（AH九一五―三）があります。この日記から旅の様子を紹介します。

義和は九月一日の朝に久保田を出発します。途中の宿々も少ないであろうと、お供の数は控え目にしました。日記には同行した役人の名前と人数が書かれています。それには家老の岡本又太郎をはじめ用人・膳番やそのほか諸役人など、合わせて二百人余とありますが、さらに軽輩の者を加えると総勢三百人余にもなりました。少なめにしてもこれくらいのお供が必要だったのだでしょう。

秋田・山本両郡の旅

巡覧の旅は、鹿渡・荷上場・前田・小沢銅山・真木銅山・七日市・大館で宿をとり、大館から羽州街道に入り、さらに荷上場・豊岡・鹿渡に宿泊し、九月十二日に久保田へ帰る十二日間の日程でした。途中松山では多賀谷や松野、扇田では十二所から駆けつけた茂木、大館では佐竹石見など、それぞれの家からの大勢の者に賑やかに迎えられました。

久保田を出た一行は羽州街道を北上し、鹿渡

・松山を通り切石から米代川を船で上り、荷上場・小繫を経てまた米代川を渡り阿仁街道に入り、阿仁川を縫いながらの旅になります。皆を乗せるには三十艘余の船を要しました。米内沢を通り前田（マイ田）に着きましたが、あいにくの雨続きで川が増水し足止めになり、前田で二泊することになりました。しかし小雨を見計らい、村人が小舟を集めて造った浮橋を渡り、ようやく川を越え鉞山へ足を進めることが出来ました。



『阿仁絵図』（A二九〇―二四八二）

阿仁鉞山

街道は水無村から銀山町まで家並みが続き人も多く、ほとんどが近くの銅山で暮しを立てている者のようです。義和は二日間にわたって銅山を見廻りましたが、はじめに町の中にある「山神の祠」に立ち寄り、夕暮れに小沢銅山役所に着きました。近くには銅山で働く者の長屋が、山の高低に沿って多く建てられているのが見えます。

翌日は役人の説明を聞きながら鉞石の選鉱と、銅の精錬の様子を見て廻りました。選鉱場では鉞石を大きな錘で砕く者がおり、一方では大勢の若い女が水流で鉞石をゆらしながら選別をしています。しかし、それはなんとも言いよう

ない歌を唄いながらの作業でした。

次に鉞石を焼く多数の大釜や大量の薪や炭を積み上げ、フイゴなどを備えた製錬場に行きます。そこでは鉞石が融けて熱湯のようになる模様や、素吹・真吹という二段階に分けて行われる銅の精錬を、時間をかけてじっくりと見届けています。

その後向かった真木銅山では、あちこちの山から掘り出された銅鉞石や、そのほか種々の石を見せてくれましたが、これは恒例のことであったようです。このほか近くの三枚・市の又銅山などからも廻山の願がありました。しかしこれには応じられず真木銅山を離れました。

久保田へ

真木銅山を出て八木橋・扇田・大館を廻り、羽州街道を上り久保田への帰路につきます。しかしその途中も鷹狩りを楽しみながら、十二日の夕刻ころ城に帰りました。日記には毎日のように歌が書かれ、お供に詠ませたものも含め、あわせて三十八首も載せられています。日記の最後には「此ほと山川のはるけきみちすからもことゆえなく帰りたるにつけても」と書き、

たとりこしあを思ひは山川の

こころにうかふ道そたのしき

と詠んでいます。

【藤田誠治】

公文書館講座報告

今年度も各種講座を開催しました（講座テーマ一覧参照）。コロナ禍により、昨年に引き続き半数程度の募集でしたが、受講された方々の熱心さには毎年圧倒されるばかりです。

「古文書解読講座」では、初級と中・上級を対象を分け、①一字一字を判読する、②文章として読み下す、③背景も踏まえ内容を理解する、という段階を意識しながら実施しました。③の段階を期待する方が多かったです。一方で、「古文書の世界」への足がかりとして当講座をご利用いただく方も多数見受けられました。

また、今年度の「歴史講座」では全2回とも「秋田県行政文書」を用い、この膨大な文書群（2万748点）は後世に伝えるべき「秋田県の歴史」そのものと言える資料です。どうぞ、ご来館の上、ご自身の目でお確かめください。

「出前講座」は、県内の団体やグループで行う学習会に、依頼に応じて講師を派遣するものです。当館所蔵資料をふんだんに使った講座です。来年度も実施しますので、希望される団体・グループは、県の公式ウェブサイトにて実施要項をご確認の上、当館までお問い合わせください。



古文書解読講座⑥より

公文書館講座テーマ一覧

◆古文書解読講座

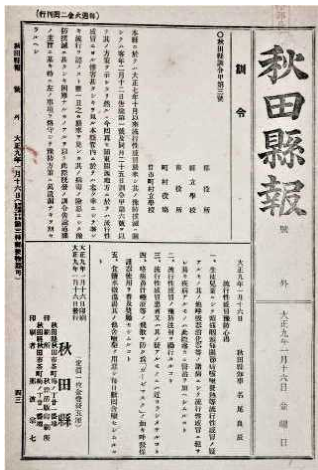
- ① 候文を読む
 - 「国典類抄」を題材に-
- ② 古文書で読む 秋田のくらし
- ③ 家老の日記で学ぶ古文書
 - 「岡本元朝日記」を題材に-
- ④ 佐竹家文書に見る秋田戊辰戦争
 - AS212.1シリーズ 連続解読-
- ⑤ 摺上原の戦、佐竹義直vs. 伊達政宗
 - 「義直家譜」を読むⅡ-
- ⑥ 「義和公阿山・比川御道の記」を読む

◆歴史講座

- ① 【企画展連携講座】 廃藩置県150年 公文書でみる秋田の歴史
- ② クニマスはなぜ生き残ったのか
 - 文書は小説より奇なり-

◆出前講座

- ① 古文書教室 (東成瀬村ふるさと館)
- ② 幕末政治史 (秋田おもと高齢者大学)
- ③ 佐竹家文書に見る秋田戊辰戦争 (神岡中央公民館)
- ④ 古文書で読む秋田のくらし (エスパークにかほ)



企画展報告 秋田県誕生一五〇年記念事業 廃藩置県一五〇年 公文書でみる秋田の歴史

前期 8月26日～9月21日 後期 10月28日～11月30日

今年度の企画展では、明治4年（1871）の廃藩置県で秋田県が誕生して150年を迎えることにちなみ、明治以降の県内の主な出来事を紹介しながら関連する当館所蔵の公文書や資料を展示し、約5千名の方にご来場いただきました。

150年の時の流れを表現するため、当館所蔵の歴代県知事の肖像写真を用いて作成した顔写真付きプロフィールを壁面横一列にぐるりと並べて掲示し、その下に各年代の主な出来事の説明パネルを掲示し、さらにその下に関連する公文書や資料を展示しました。

現在の視点から振り返り、今日関心事となっている「感染症」「異常気象・災害」「貧困」の3つに係る出来事を重視しつつ、施設の完成や行事開催等の慶事も取り上げました。

特にお客様の関心を集めた事項としては、歴代県知事の出身都道府県、大正期のスペイン風邪対策が現在の新型コロナウイルス感染症対策と類似していたことなどがありました。

市町村公文書・歴史資料 保存利用推進会議

公文書・歴史資料の保存と利用について、取り組み強化を図ることを目的として、各市町村の公文書管理担当者及び歴史資料担当者を対象に毎年開催しています。今年度は11月26日にオンラインで開催しました。

基調講演は、安曇野市文書館の青木弥保氏から、「地域の記録を保存するー安曇野市文書館の取り組みー」と題してお話しいただきました。

平成30年10月に安曇野市文書館が開館するまでの経緯についてのお話は、公文書や地域資料の管理方法を模索している自治体においても参考となるものでした。

また、市内各施設の移転や空き家の処分時における近現代資料の散逸の問題についても触れられ、地域に密着する資料保存機関が果たす役割について、その重要性を指摘しました。詳細は当館の「研究紀要」第28号をご覧ください。

午後からは、地域資料の保存について、住民と共に取り組んだ事例報告（小坂町）や行政文書管理の現状と課題についての報告（湯沢市）がありました。意見交換では文書管理の基本が紙媒体から電子媒体に改まる動きへの対応について、各自治体の現状を確認しました。



県政映画上映会報告

県政映画は、県の仕事を広く知ってもらうために、昭和30～50年代にかけて「県政だより」などの名称で各地の映画館等で巡回上映、写真会等を行ってきました。当館は、これらを保存し、その一部を大きなスクリーンで鑑賞できる上映会を毎年実施しております。

第1回は、新型コロナウイルスの影響で残念ながら中止と致しましたが、第2回（11月2日）は、昨年夏に東京オリピックが開催されたこと

もあり、前回昭和39年に秋田県で行われた聖火リレーの模様やメダルを獲得した県出身者の県庁訪問の様子などを上映しました。なお、当館2階の閲覧室では、小さなモニターではあります、月替わりのプログラムで毎日作品を放映しておりますので、こちらも是非ご覧ください。

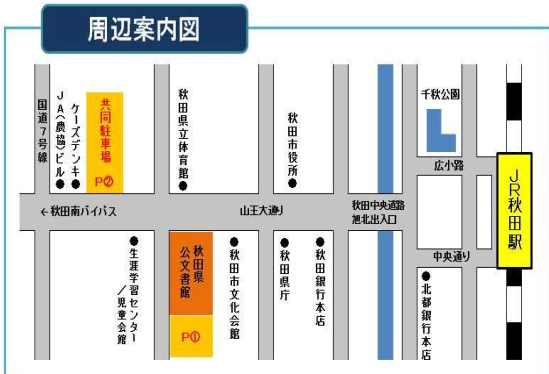


国立公文書館 アーキビスト認証について

アーキビスト(Archivist)とは公文書館の専門職員を指し、諸外国の多くでは国家資格制度が整っています。日本には公的制度がありませんでしたが、令和2年度に国立公文書館において公的認証制度が発足しました。今年度も知識・実績・研究能力等が審査され、当館職員1名を含み、全国で57名が認証されました。公文書管理についての社会的意識の高揚を背景として、アーキビストへの期待も年々高まっており、当館では今回の認証合格者を始め、職員全体で研鑽を積み、その社会的責務を担っていく所存です。

編集後記

「岡本元朝日記」最終巻の刊行です。実在した人物が語るありのままの世界で、その足跡をたどりました。元朝が死へと近づく日々には直接立ち会ったような錯覚を覚えました。そこには年月の隔たりは存在せず、むしろ同じ場所です。過去との空間の共有は心地よく、生活に根ざした土地であればなおさら、その場からの離れがたさが生じます。それは「郷土学習」の意義とも一致します。どちらも先人の営みや地域の成り立ちを深く浸透させ、「愛着」という心の醸成を促すものだからです。日本一の人口減少県にとっては、過去との対話は未来志向の取り組みなのかもしれません。(高)



当館ツイッターはこちらどうぞ



編集発行：秋田県公文書館（秋田市山王新町14-31 県立図書館と併設）
電話 018(866)8301 FAX 018(866)8303 最寄りバス停：県立体育館前
URL <https://www.pref.akita.lg.jp/kobunsho/>